

タイトル：ゴージャスお宝鑑定家

♪「うーん、ゴージャス！」♪

第一幕：開店前の騒動（10分）

舞台設定

剛田質店。アンティークな家具やゴージャスな装飾品が並ぶ店内。入口には「ゴージャス品専門」と書かれた看板が掛けられている。開店準備中で、剛田が優雅に掃除をしている。

シーン：剛田の朝のルーティン

（剛田がシルクのハンカチで店の調度品を磨いている。動作はゆっくり優雅で大げさ。）

剛田：「ふう〜、これで完璧だ。光り輝くこのショーケース、我が剛田質店のゴージャスな魂そのもの！」

(白金がバタバタと入ってくる)

白金：「剛田さん、今日こそ普通の品物を持ち込んでくれるお客さんがいるといいですね。」

剛田：「普通だと？この剛田質店に普通など存在しない！ゴージャスでなければ価値などないのだよ、白金君！」

白金：「いや、そうは言っても、日常使いの品が欲しいって人もいますからね……。」

剛田：「日常こそゴージャスに彩るべきだ！」

シーン2：町の人々の反応

(店の外を掃除する剛田。町の人を通りすがりに声をかける。)

町人A：「また派手な服着てますねえ、剛田さん。」

剛田：「これが派手だと？これこそ日常に優雅さを加える色彩美！ゴージャスたるもの、

装いからして違わねばならぬ！」

町人A：「（苦笑）まあ、頑張ってくださいね。」

（白金がため息をつきながら店の中から声をかける。）

白金：「剛田さん、そろそろ店を開けましょうよ！」

剛田：「おっと、そうだった。では開店だ！ゴージャスなお宝よ、かかって来い！」

（店の扉が開き、幕が下りる。）

第二幕：奇妙なお宝の登場（15分）

シーン1：山村の訪問

（山村がアメジスト製の電気ポットを抱えて店に入ってくる。）

山村：「すみません、この品を見ていただけますか？」

(白金が対応する。)

白金：「いらっしやいませ。これは……電気ポットですか？」

山村：「ええ。ただのポットじゃないんです。ほら、これ全部アメジストなんですよ。」

(剛田が急いで前に出てくる。)

剛田：「アメジストだと!？」

(ポットを見るなり、剛田が大袈裟に感動する。)

剛田：「なんということだ!この深い紫、気品に満ちた輝き!うくん、ゴージャス!」

白金：「いやいや、ただのキラキラした電気ポットですよね?」

剛田：「白金君、それはこの芸術品に対する最大の冒涜だ!」

シーン2:ポットの来歴

(山村がポットの歴史について語る。)

山村：「実はこれ、祖母が持っていたものでして。昔、ある名匠が特注で作ったと聞いています。」

剛田：「素晴らしい！これは間違いなくゴージャスの極み！どれ、少し詳しく見てもみよう。」

（剛田がポットを手に取り、じつくりと眺める。）

剛田：「……見てごらん、このカット。光の反射角度が完璧だ。これは日用品ではない、もはや芸術品だ！」

白金：「お湯が沸くかどうかが大事故じゃないですか？」

剛田：「ゴージャスに湧くのだよ、白金君！」

第三幕：石言葉を熱弁する（15分）

シーン二：アメジストの石言葉を解説

（剛田がポットを抱え、愛おしそうに見つめながら話し始める。）

剛田：「アメジスト……それは古代より神秘と高貴の象徴。石言葉は『誠実』『調和』

『真実の愛』！これを素材にしたポットなど、もはや奇跡だ！」

白金：「誠実と真実の愛がどう電気ポットに関係するんです？」

剛田：「関係など不要だ！見るだけで心が高揚する。ゴージャスとはそういうものだ！」

山村：「でも、使いやすいかどうかかも大事じゃないですか？」

剛田：「使いやすさなど二の次！それがゴージャスの本質だ！」

（剛田、突然舞台中央で振り返り、観客に語りかけるように熱弁する。）

剛田：「かの古代ギリシャではアメジストは酒に溺れないための護符とされた。それが今や、

この電気ポットに姿を変えたのだ！これ以上の進化があるだろうか！」

白金：「……ありますよね？普通に便利なステンレス製のポットとか。」

シーン2：剛田のゴージャス論が暴走

（剛田がさらにアメジストの魅力について語り続ける。）

剛田：「紫、それは王者の色！この色彩は見る者を魅了し、日常を高める！白金君、君の心にも響いているだろうか？」

白金：「いや、響くどころか逆に疲れてきましたけど……。」

（山村はポットを眺めながら困惑気味。）

山村：「そんなにすごいものだったんですね。でも、実はあんまり使ってなくて……。」

剛田：「なんと！こんな美しいものを日々使わないとは、人生を無駄にしている！」

白金：「いや、使わないから綺麗なんじゃないですか？」

（剛田、さらに力強く熱弁を続ける。）

剛田：「白金君、このポットでお湯を沸かすと、それは単なる行為ではない。魂を浄化し、心を洗う儀式なのだ！」

白金：「ただの電気ポットですよね？」

第四幕：実際に使ってみる（15分）

シーン：実験スタート

（剛田が慎重にポットを店内のテーブルに置き、スイッチを入れる準備をする。）

剛田：「さあ、このゴージャスなポットでお湯を沸かしてみようではないか！」

白金：「スイッチを押すだけですよね？」

剛田：「いやいや、白金君、スイッチを押すにもゴージャスな所作が必要だ。」

（剛田、やたらと優雅な手つきでスイッチを押す。）

剛田：「……これだ！この瞬間！うくん、ゴージャス！」

白金：「いや、押しただけですけど。」

シーン②：ゴージャスな紅茶を淹れる

（ポットが湯を沸かし始める音がする。剛田が真剣な表情で湯気を眺める。）

剛田：「見たまえ、この湯気。この柔らかさ、そして煌めき！ただのお湯ではない、これは生命の息吹だ！」

白金：「湯気の感想なんて初めて聞きましたよ……。」

（お湯が沸き、剛田が紅茶を淹れる。）

剛田：「紅茶とは、水と茶葉の調和。その調和を極めるには、このポットの力が必要なのだ！」

白金：「普通のポットでも同じですよ
ね？」

剛田：「違う！これで淹れた紅茶には魂
が宿る！」

（剛田が一口飲み、目を閉じて感動す
る。）

剛田：「うん……ゴージャス！」

白金：「（一口飲み）……味は普通です
ね。」

第五幕：財津との対決（20分）

シーン：財津の登場

（店のドアが勢いよく開き、財津が堂々と入
ってくる。スーツ姿でいかにも高飛車な態
度。）

財津：「噂を聞いて来てみれば、やはりここで
したか。相変わらず奇妙なものをゴージャス
と持て囃しているようですね、剛田さん。」

剛田：「財津君……また来たのか。」

（白金が戸惑いながら小声で剛田に話しかける。）

白金：「この人、またですか？どなたなんです？」

剛田：「彼は財津質店の店主。いわば、私の永遠のライバルだ。」

財津：「ライバルだなんて光栄ですね。ただ、私は現実的な価値を見極める鑑定士。あなたのような『美しければ全て良し』ではありませんよ。」

剛田：「フッフ、愚かだな財津君。ゴージャスこそが価値の頂点。美しさを否定するなど、品位の欠片もない証拠だ。」

白金：「いや、論点そこじゃないですよね……。」

シーン2：ポットの評価を巡る対決

（財津が山村の持ってきたポットを冷ややかに見つめる。）

財津…「なるほど、アメジストの電気ポットですか。確かに素材としては珍しい。しかし、実用性に欠ける。重いし、熱伝導も悪い。」

剛田…「実用性？フッフ、これだから凡人は困る。このポットの本質は素材の価値だけではない。その存在そのものが高尚な芸術だ！」

財津…「芸術と言い張れば何でも価値が出るとでも？」

(～人の間で火花が散るような緊張感。)

白金…「(山村に小声で)なんか話がどんどん壮大になってますね……。」

山村…「僕、ただ値段を知りたかっただけなんですけど……。」

シーン3: ゴージャス < 実用のパフォーマンス

対決

(剛田がポットを手に取り、財津に向かって提案する。)

剛田：「分かった、こうしよう。このポットの価値を証明するため、紅茶を淹れてみるのほどうだ？」

財津：「紅茶……面白いですね。では、私もこちらの普通の電気ポットで淹れてみましょう。」

（～人がそれぞれのポットで紅茶を淹れる準備を始める。剛田は優雅で大げさな動き、財津は無駄のない洗練された手際。）

白金：「なんで紅茶対決になってるんですか……？」

山村：「なんかすごいことになってますけど、僕のポット、耐えられるかな……。」

（剛田、茶葉を振りまくように「舞」を披露しながら紅茶を淹れる。）

剛田：「紅茶は心の芸術。このポットの力がなければ、このような香り高い一杯は生まれません！」

財津：「実際の味が全てです。それ以外はただの自己満足。」

（観客役として、白金と山村が二人の紅茶を飲み比べる。）

白金：「（飲んで驚くふり）……あれ、剛田さんののは意外と美味しいですね。」

山村：「（飲んで冷静に）でも財津さんののも悪くない。むしろ普通に飲みやすい。」

剛田：「美味しさではない！この一杯に宿る美学が大事なのだ！」

財津：「負けを認めたくないだけでしょう？」

シーン④ 決着と買取交渉

（山村が意を決して口を開く。）

山村：「ええと……お二人とも、ありがとうございます。ございました。でも、やっぱり僕としてはこのポット、どうしても売りたいんです。」

剛田：「もちろんだ！この品、100万円で買い

取らせていただこう！」

財津：「待ちなさい、剛田。そんなに価値があるものではない。私は9万円と見た。」

（剛田、怒りを抑えながら堂々と宣言。）

剛田：「このポットはただの品ではない。私の心を動かした。それだけで値段に計算できない価値があるのだ！」

財津：「（苦笑しながら）どうやら勝負はついたようですね。では、これで失礼。」

（財津が出て行き、剛田が満足げに山村と握手する。）

剛田：「これがゴージャスの力だ。山村君、大事に扱わせてもらうよ！」

山村：「はい、ありがとうございます……（ちょっと困惑顔）。」

第六幕：結末（15分）

シーンニエピソード

(店内にポットがディスプレイされている。剛田が誇らしげに眺めている。)

剛田：「やはり、このポットは我が店にふさわしい……うん、ゴージャス！」

白金：「でも、これどうやって売るんですか？
買いたい人いるんですかね？」

剛田：「売るのではない！展示するのだ。これはゴージャスの象徴、剛田質店の顔なのだよ！」

白金：「(ため息)……本当にいつもこんな感じなんですな。」

(幕が降りる直前、剛田がカメラに向かってウインクしながら一言。)

剛田：「ゴージャスたるもの、優雅たれ！」

合計：60分